

日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <https://www.jnpc.or.jp/>



創立50周年、盛大に祝賀の宴

創立記念日の11月1日、会場の10階ホールに政財官界や各国大使館からの招待者、会員315人が集い、日本記者クラブの50歳の誕生日を祝った。

日本記者クラブが創立半世紀 ウェブ版「50年史」も完成

日本記者クラブが創立50周年を迎え、創立記念日の11月1日に祝賀パーティーを開きました。

半世紀前、当クラブの本拠地、日本プレスセンタービルは存在せず、ホテルの部屋を借りて会見を行っていました。事務局も日本新聞協会の一隅にあったと聞いています。会見運営のノウハウ、会員制度の仕組み、会場などの設備から、緑の綴帳や文具に至る備品まで、先人の皆さんがゼロから営々として築いてこられたものです。この場を借りて、深く感謝の意を表します。

記者会見などのプレス向け行事は創立1年目が年50回、それが今年200回を超えています。

近年は会見以外にも、全国の記者が参加する取材団、研修会、記者ゼミなど、日本記者クラブらしい社を横断した活動にも力を入れています。また膨大な数の会見を記録した動画や音声もウェブを通じて一般に無料公開し、「ニュースの発信基地」だけでなく「現代史の記録者」としての機能も果たしています。

今回、新たに作成したウェブ版「日本記者クラブ50年史」は当クラブのホームページでご覧いただけます。来月号の会報では、50周年記念の別刷りも発行します。

今後とも会員の皆さまの一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

(専務理事 土生修一)

創立50周年記念パーティー



白石黄良々選手(左)を交え、お祝いの鏡開きを行う原田亮介理事長(中央)と梅野修副理事長

日本記者クラブの創立50周年を記念するパーティーが創立記念日の11月1日、10階ホールで開催された。冒頭、原田亮介理事長が「クラブ50年の歴史を築いてくれた諸先輩に改めて感謝の意を表したい」と挨拶、乾杯の音頭をとった。

続いて、原田理事長、梅野修副理事長に、特別ゲストの白石黄良々選手(世界陸上選手権男子400メートルリレー銅メダリスト)も加わり、鏡開きが行われた。

安倍晋三首相も公務の合間を縫って駆け付け、お祝いのスピーチを行った。300人以上で埋め尽くされた会場では、2時間以上にわたり懇談の輪が広がった。



中江利忠第7代理事長(左)と堀越作治会員



左から04年度クラブ賞受賞者の春名幹男会員、北村正任第13代、滝鼻卓雄第14代の各理事長



東京2020組織委員会の武藤敏郎事務総長と懇談する杉田亮毅第12代理事長(右)

原田亮介理事長あいさつ

(日本記者クラブが誕生した)50年前の1969年は東京オリンピックの5年後、大阪万博の1年前でした。外国から要人が来た時に会見する場所がないじゃないかということ各社が手を携えて当クラブが誕生しました。50年の歴史を築いていただいた皆さまの御努力に感謝を申し上げます。いま私たちはトランプ米大統領の登

質高い報道の拠点として

場をきっかけに世界的な混乱の時代にあります。我々は伝統メディアの退潮とフェイクニュースの拡散に直面しています。質の高い報道を維持することが民主主義の礎でありますし、それを守る拠点が日本記者クラブであろうと思います。そのために皆さまの記者クラブへのご助力を引き続きよろしくお願いたします。



左から吉田慎一第16代理事長と公正取引委員会の杉本和行委員長



オリックスの宮内義彦シニア・チェアマン(中央)と懇談する斎藤史郎第15代理事長(左)と今井環元副理事長



(前列右から)高市早苗総務相、玉木雄一郎国民民主党代表らも参加した



50人近くの外国人招待者のために、クラブで長年、海外ゲスト会見の通訳を担当してきたサイマル・インターナショナルの長井鞠子さんが通訳した



左から森永公紀会員、粕谷賢之理事、小松浩総務委員長



左から99年度クラブ賞受賞者の黒岩徹会員、エチオピア大使館のウデネ・ワカヨ一等公使参事官、中井良則前専務理事、土生修一専務理事



「おめでとうございます」。多数の招待者からお祝いの言葉を受ける原田理事長(左)



初代総務部長を務めた春原昭彦会員(右)と橋場義之会員



クラブがプレスセンタービルに移転するころ総務部長を務めた桂敬一会員(左から3番目)と旧事務局職員の方々の皆さん

安倍晋三首相お祝いのスピーチ

ピンチをチャンスに 50周年おめでとうございます。(私はここで)国政選挙6回、総裁選2回、白熱の論戦をしました。皆さまから厳しいご質問をいただきましたが、きょうは和やかに会場に足を運ぶことができました。

この場には政治家だけではなく世界からアスリートやビジネスマンなど、「時の人」が集まる場所であり、ここからニュースが世界に発信されました。それだけ皆さまの役割は大きかった。改めて敬意を表したいと思います。

50年で大きな変化がありました。デジタル化、SNSの登場であります。人々の(情報の)受け取り方も大きく変わりました。横並び、どこかで聞いたような独りよがりな発信は見向きもされません。

これをピンチととらえるのかチャンスととらえるのか。ぜひメディアの皆さまにもこの変化をチャンスととらえていただき、さらに発展していくことを期待しています。



左から時事通信の渡辺祐司常務、小田尚第18代理事長、田中隆之会員資格委員長



14年度クラブ賞受賞者の山田孝男会員(左)と公明党の山口那津男代表



伊藤芳明第17代理事長(左)と会員歴30年のカナダ大使館の清水いりやさん(右)



左から鈴木美勝会員、立憲民主党の福山哲郎幹事長、千野境子会員



副理事長の正籬聡さん(左)



この日の一番の人気はアラスカシエフ特製のローストビーフ



クラブのオリジナル日本酒をつくった新潟県五泉市の「金鶏盃酒造」が鏡開き用に選んだたる酒は美味と大好評

下記のゲストの会見レポートは5～8ページに掲載しています

上野 愛咲美 囲碁・女流棋聖

■ 10・11 (金) 記者会見 / 司会: 小川記代子委員 / 出席: 30人

浅川 伸 日本アンチ・ドーピング機構専務理事

■ 10・21 (月) 「オリンピック・パラリンピックと社会」① / 司会: 森田景史委員 / 出席: 30人

山梨 俊夫 あいちトリエンナーレのあり方検証委員会座長

■ 10・18 (金) 「<表現の不自由展・その後>のその後」① / 司会: 川上高志委員 / 出席: 57人

野田 邦弘 鳥取大学特命教授

■ 10・24 (木) 「<表現の不自由展・その後>のその後」② / 司会: 坪井ゆづる委員 / 出席: 45人

芝野 虎丸 囲碁・名人

■ 10・18 (金) 記者会見 / 司会: 小川記代子委員 / 出席: 45人

津山 恵子 ジャーナリスト

■ 10・28 (月) 「トランプ政権と対峙する米メディア NYからの報告」 / 司会: 土生修一専務理事 / 出席: 96人

和田 春樹 東京大学名誉教授



歴史を振り返り日韓双方の非を指摘した上で「年末には差し押さえた日本企業資産の競売手続きが始まる。12月から来年の五輪までを『オリンピック休戦期間』として全ての措置を凍結し、交渉に努力してもらいたい」と五輪停戦の伝統になぞらえた提案を行った。

■ 10・2 (水) 「朝鮮半島の今を知る」④ / 司会: 五味洋治委員 / 出席: 69人

ウェイウェイ・ヌー ミャンマー人権活動家



父が民主主義活動家というだけで自身は政治犯として7年間投獄。「アウンサンスーチーは私のヒーロー。しかし今は権力を正しく使っていない」と批判。日本の援助には「ミャンマー政府への援助は民族浄化の手助けになる。現地の団体に直接援助すべき」。

■ 10・8 (火) 記者会見 / 司会: 杉田弘毅委員 / 通訳: 池田薫 / 出席: 30人

遊川 和郎 亜細亜大学教授



抗議運動への香港政府の対応は「政治的譲歩、経済措置、武力鎮圧などがあるが、いずれも非現実的」と指摘。「住宅価格の非常に高値への不満が抗議の背景にある。不動産を牛耳る財閥に圧力をかけ価格を下げて鎮静化させようと香港政府は考えている」

■ 10・4 (金) 「米中争覇」⑤ 混乱が続く香港の行方 / 司会: 坂東賢治委員 / 出席: 83人

松田 康博 東京大学教授



「(政治的リスクの面で)台湾の年金問題は日本の消費税問題に相当する。そこに手をつけた蔡英文政権は支持率が低下、昨年の地方選は大敗。しかし香港のデモ拡大などの影響で総統選は蔡氏優勢に」と分析。米中対立は「対中投資が多い台湾が最大の被害者」。

■ 10・10 (木) 「米中争覇」⑥ 台湾総統選と米中対立 / 司会: 坂東賢治委員 / 出席: 70人

▼ 写真回廊	▼ クラブゲスト	▼ 目次
▼ MAYBOOKマイPR	▼ 創立50周年記念パーティー	2 / 3
イラストレーター・田村セツコさん	▼ 和田春樹 東京大学名誉教授 / 遊川和郎 亜細亜大学教授 / ウェイウェイ・ヌー ミャンマー人権活動家 / 松田康博 東京大学教授 / 松下修三 日本エイズ学会理事長 / 外村大 東京大学大学院教授 / 横大道聡 慶應義塾大学大学院教授	4 / 5
▼ リレーエッセー	▼ 会見レポート	5 / 8
書いた話書かなかつた話	上野愛咲美 囲碁・女流棋聖 / 山梨俊夫 あいちトリエンナーレのあり方検証委員会座長 / 芝野虎丸 囲碁名人 / 浅川伸 日本アンチ・ドーピング機構専務理事 / 野田邦弘 鳥取大学特命教授 / 津山恵子 ジャーナリスト	9
皇室報道、抜きつ抜かれつ悪戦苦闘	▼ 被災・防災・減災 最前線	8
塚原政秀	▼ 記者ゼミ	8
▼ 新・列島報告 岩手県	▼ ワーキングプレス	10 / 12
釜石市でラグビーW杯	関電役員金品受領問題	
岩手日報社 細田清	共同通信社 中島正喜	
13	▼ 諫早湾干拓訴訟	
共同通信社 金澤皓介	ベルリンの壁崩壊から30年	
14	西日本新聞社 中井良則	
15	13	
16	13	
18	13	
20	13	

囲碁や将棋の世界では、女流棋士が男性棋士を押しつけてタイトルを取ったことはなく、男性が優位なゲームだと思われてきた。9月、囲碁界に異変が起きた。全ての棋士に参加資格のある棋戦ではこれまで、女流棋士は8強入りが高かったが、上野愛咲美女流棋聖(当時17)は竜星戦でタイトルホルダーら男性トップ棋士を連破し、準優勝を果たしたのだ。

上野 愛咲美 囲碁 女流棋聖
10月11日

「男女差、感じたことない」
囲碁は本当に男性優位のゲームなのか。上野女流棋聖は「男女差を感じたことはない」という。そして、「男の人はすごく熱心に、とことん研究するというイメージがあった。男の人のように、とことん研究すれば追いつける」と考えて、今はプロを超える実力を持つAI(人工知能)で研究を積み、実力を高めた。強さの特徴は、「ハンマー」と呼ばれる積極的な攻め。相手の石を攻め取る展開を得意とし、逆に1目を争うような細かい碁は好まない。竜星戦のような持ち時間の短い「早碁」は隙が生まれやすいが、持ち時間の



上野愛咲美(右)、左は師匠・藤澤一将

以外の7大タイトル戦でも結果が残せるかが今後の課題になるだろう。最近の女性若手ゲストでは全英女子オープンゴルフで優勝した渋野日向子選手(当時20歳)を思い出す。

長い棋戦で細かい碁になりやすい。実際、上野女流棋聖は7大タイトル戦で本戦入りを果たしておらず、早碁上野一就。上野さんも渋野さんのように大舞台でも緊張を見せず、むしろ笑顔をやさしい。上野女流棋聖を破って女流棋士の棋戦初優勝を阻んだ一力遼八段は「自分が17歳でNHK杯決勝に出た時は、緊張してうまく打てなかった」と言い、緊張感を見せず、むしろ自身を投了寸前にまで追い込んだ上野女流棋聖の大胆さに舌を巻いていた。翌日の各紙は、決勝戦で敗れた上野女流棋聖の満面の笑みが紙面を飾った。「笑顔のシンデレラ」が囲碁界でも誕生した。毎日新聞社会学部 丸山 進

松下 修三 日本エイズ学会理事長



北海道の男性がHIV感染を告げなかったことを理由に、病院での就職内定を取り消された。「病院への怒りはあるが、攻撃しても解決しない。エイズは治療が続ければ普通に生きられる病。差別はこうした知識がないから起きる。知ることが差別・偏見をなくす」

■10・23(水)「HIV/エイズ」/司会:宮田一雄会員/出席:24人

外村 大 東京大学大学院教授



「(朝鮮人に対して)無能なので日本人に従うのが当然、としてその労働力、資源、土地、文化を日本人のために使う。これが植民地主義。徴用であるかどうか、労働動員法に基づくかどうかではない。日本人は、そういう実態を認めて反省、謝罪することが重要」

■10・25(金)「朝鮮半島の今を知る」⑤ 朝鮮人強制連行の実態/司会:五味洋治委員/出席:46人

横大道 聡 慶應義塾大学大学院教授



専門は憲法。「トリエンナーレ実行委員長が知事だったことで、表現が県に帰属すると誤解された」と指摘。「多様な価値の流通との観点から、助成の判断は公権力ではなく芸術の専門家に委ねるべき。そうした専門家の育成と表現の帰属の明確化が今後の課題」

■10・25(金)「<表現の不自由展・その後>のその後」③/司会:坪井ゆづる委員/出席:30人

会見余話

●囲碁界のスター2人がゲストの最年少記録更新
囲碁界の若きスター2人が日本記者クラブのゲスト最年少記録を塗り替えた。
男女すべての棋士に参加資格のある棋戦(竜星戦)で女性棋士として初めて準優勝に輝き、10月11日に会見した上野愛咲美・女流棋聖は2001年10月26日生まれ(17歳)の当時。半世紀を迎えるクラブの歴史を通じて、最年少のゲストになった。

さらに10代で史上最年少の囲碁名人となり10月18日にゲストとして登壇した芝野虎丸・名人は1999年11月9日生まれの19歳(当時)で、こちらは男性ゲストとして歴代最年少者となった。
これまでの最年少ゲストは、香港の民主化運動活動家の黄之鋒(ジョシユア・ウォン)さんと周庭(アグネス・チョウ)さんの男女2人で、2人そろってクラブで会見(2017年6月15日)した時には共に20歳だった。

「表現の不自由展・その後」のその後①

山梨 俊夫

あいちトリエンナーレのあり方検証委員会
座長

10月18日

文化庁の補助金不交付に反対 美術館・芸術祭にも自主性必要



トンガった現代美術のアーティストたちも「聞いてみるだけで心が落ち着く」と評する山梨俊夫・国立国

際美術館館長の声だが、飛び出す言葉はなかなか骨太だ。この日の会見でも語り口こそ穏やかだったが、国際芸術祭「あいちトリエンナーレ」への補助金不交付を決めた文化庁を、「個人としても、国立美術館の館長としても反対だ」と一刀両断した。元従軍慰安婦を題材にした「平和の少女像」などへの抗議電話が殺到する「電凸」を受け、トリエンナーレの企画展「表現の不自由展・その後」が開幕（8月1日）から3日で中止に追い込まれた問題。不自由展中止に抗議した国内外の作家15組が作品を辞退・変更する事態に発展

していった。そんな中、山梨館長は愛知県が設置した「トリエンナーレのあり方検証委員会（現・検討委員会）」の座長に就任した。

検証委は「（不自由展は）条件が整い次第、速やかに再開すべき」とした中間報告を公表。不自由展は10月8日に再開し、辞退作品も復帰。トリエンナーレは同月14日、開幕時と同じ完全な形で開幕した。

山梨館長は会見で、検証作業の中で気付いたこととして「美術の変容」を挙げた。日本の美術は長らく、政治性や社会性から切り離されてきた。しかし、1980年代以降、アーティストたちは「美しいものを作るより、作品を通して社会とどう関わっていくか」に重点を置くようになったという。この結果、平和の少女像のように、社会の中のある一定の層と衝突する作品も生まれるようになった。

「文化、芸術の独立を守るためにも議論を呼ぶ作品を展示する方法を独自に決め、最後まで責任を取る。美術館や芸術祭の側にも自主性が求められている」。こう語る山梨館長の声はやはり落ち着いていたが、強い信念も感じられた。

毎日新聞社中部報道センター

竹田 直人

芝野 虎丸

囲碁・名人

10月18日

「成り行きでやっているだけ」 勝負師らしくない最年少名人

一途に勝利を求め、頂点をめざす。そんな従来の勝負師像を打ち砕くスターが囲碁界に誕生した。プロ入りから5年1カ月、19歳11カ月で史上最速、最年少名人になった芝野虎丸名人は、勝負師らしくないことをぼろぼろと口にした。

小学3年のとき、先に囲碁にハマった兄に引きずられるようにプロ養成の囲碁道場に入門。俊才だらけの道場生に負け続けた。「いやになりました。ずっとやめたかったんですけど、親に言い出しづらくて」。父は囲碁の良書があると聞いては絶版本まで探し出し、中国や韓国からも取り寄せて息子を応援した。



芝野名人（右）と師匠・洪清泉四段（左）

姉は東大大学院、プロ二段の兄は東京理科大、妹は高校に通う。本人は高校に進まなかった。道場より学校の

ほうが好きでした。高校に行きたい気持ちもあったけど、学校を早退して道場に通ううち、勉強が大変になって」。退路を断ったはずのプロ試験も何度か落ちた。「正直、そこまでするプロになりたいという強い気持ちはなく、そんなに悲しいことはなかったです」

「じゃあ、なにをモチベーションに棋士の道を歩んできたのですか？。たまりかねた司会者の問いかけに、「いまのところ何をしたいというのはなくて、成り行きでやっているだけというのはあるんですけど、囲碁が楽しいし、苦しいということもないです」。そのことを聞いて、彼は囲碁というゲームを純粹に楽しみ、天賦の才能が名人へ押し上げたのだと思った。

「虎丸は碁盤だけを見て盤上で全力を尽くす。それが一番の長所」と、同席した師匠の洪清泉四段。10月25日から第一人者の井山裕太四冠に挑む王座戦五番勝負が始まり、開幕戦を制した。「相手が誰かは気にしません」と気負いは感じられない。凡人の想像を超える境地にいることは間違いない。

朝日新聞社文化くらし報道部

大出 公二

「オリンピック・パラリンピックと社会」①

浅川 伸 日本アンチドーピング機構専務理事

10月21日

巧妙さ増すドーピング 根絶に向け戦いは続く



「9秒79」という数値は忘れ難い。スポーツに関わる人にとって悪夢の数字だろう。陸上男子100メートル世界新。ソウル五輪（1988年）。そして、ベン・ジョンソン。関連ワードどころか光景まで鮮明に思い出せる。31年も前の出来事。同じ大会で、日本の金メダリストをすぐ思い出せるか。問いを重ねること、罪の深さがより明確になる。素晴らしいパフォーマンスを上書きして、人の記憶にこびりつく。それがドーピングです。日本アンチドーピング機構（JADA）の浅川伸専務理事はそう語った。ドーピングの手法は年々、巧妙の度を加え、分析技術の進歩が後追いで追及の手を伸ばしている。大会中

の摘発はレアケースで、10年間保存される検体の再検査により、不正が暴かれるのが大半という。2020年東京五輪・パラリンピックも、その例外ではあり得ない。

選手単独ではなく、指導者を含むチーム、薬物の流通経路を束ねるシンジケートの介在が、根絶をより難しくしている現実も語られた。詳細は会見動画を見てもらうとして、浅川氏が揮毫した「勝利を超える価値がある」は、胸に刻みたい言葉である。

来夏のオリパラは、日本に何をもたらすのか。モノを足していく1964年大会をなぞるだけでは東京が持たない。五輪後の日本を待つのは、「心のバリアフリー」という言葉で解決するほど薄っぺらな変化でもない。老いという巨大な磁石で、誰もが「弱者」と呼ばれる立場へ日一日と吸い寄せられる。バリアフリーは障害を持たぬ人が持つ人にもたらす社会的変化ではなく、わが身に迫る課題として捉える。そんな思考の切り替えも、シリーズ『オリパラと社会』を通して一人一人に試みてほしい。「2020」をまぶしい記憶を宿した数列に磨き上げるためにも。

同シリーズ担当企画委員 産経新聞社
論説委員 森田 景史

「表現の不自由展・その後」のその後」②

野田 邦弘 鳥取大学特命教授

10月24日

審査委員を抗議辞任 「今は政治と芸術は不可分」



文化庁の補助金不交付の決定に異を唱え、補助金審査委員を辞めた人だけに、現状を厳しく批判した。まずは元横浜市職員らしく、「地方自治の観点」から。不交付の理由に「運営を脅かすような重大な事実を申告しなかった」とあることについて、「主催する愛知県が責任を持つて対処すべき問題だ。国に相談がなかったので補助金を出さないのは地方自治への侵害だ」と指摘した。次に挙げたのは「審査委員会の軽視」。採択案件の撤回は前例がないことや、委員会に諮ることなく官僚が決めたことを問題だとした。また、文化庁長官が決裁していない、不交付決定の議事録がない、文化庁は現場視察も行っていない点などにも疑問を呈した。さらに「不

自由展」が再開されたのを踏まえ、不交付の理由だった「実現可能性」「事業の継続性」は解消されたとの認識を示した。

その上で、現状は電話攻撃やテロ予告で事業を中止にさせるだけでなく、国の補助金を引きはがせる前例になりにかねないとの危機感を表明。

「このような事態が常態化すれば芸術活動に限らず、学術研究、思想表現、宗教活動など人間の知的活動全般への影響が懸念される。その結果、知的活動の低下を招き、日本の国力低下につながる」と述べた。会場からは「平和の少女像」について、「政治的運動の道具として利用されたものを、どうして芸術だと認めたのか」との質問があった。

これに対する回答が秀逸だった。「政治と芸術が一線を画す時代ではない。政治的な争いそのものが作品になる時代」だと、移民、LGBTなどをあえて挑発的に取り上げ、論争を起すためにやっているという現代アートの状況を説明。「それに公金を出すのを認めない」という議論はあるが、国家や地域、都市の文化は多数派の意見だけではないのか」と問いかけた。

企画委員 朝日新聞社論説委員 坪井 ゆづる



「トランプ政権と対峙する米メディア」 NYからの報告」
 津山 恵子 ジャーナリスト
 10月28日
 ユーヨークタイムズ紙に気候変動の科学的根拠を疑問視するコラムが載ると、不買運動が起きた。
 メディアは大統領や市民

「トランプ政権と対峙する米メディア」 NYからの報告」
津山 恵子 ジャーナリスト
 10月28日
「受難の時代」に新たな動き

注目度の高さは、10階の記者会見場が埋まったことにも表れていた。ニューヨーク在住16年。2017年から3年連続で登壇し、米国のトランプ大統領とメディアの現状を紹介してきた。

トランプ氏の就任以来、米国ではますます分断が進む。この状況を生んだのはメディアが先か市民が先か？ 「読者が分極」の例がいくつもあるという。メディアへの信頼度は民主党員は76%だが、共和党員は21%で大きな差がある。リベラルは良き理解者かという点、要求も高い一方で、異なる意見を許さない。ニ

から敵視され、受難の時代を迎えている。だからこそ、ライバル社との協力など新たな動きが出ている。

大統領への質問の仕方の変化が興味深かった。トランプ氏が質問に答えなければ、他の記者が同じ質問を繰り返して、説明を求めると。国民の代表として、政権批判すべき時に共闘しているという。

来年の大統領選に向けた報道の変化も紹介した。「トランプ当選」を読めなかった16年の反省から、大手テレビ局などは地方メディアでリストラされた記者を雇い、地元の空気を探っている。

取材する側もされる側もソーシャルメディアを駆使し、舞台はますますデジタルに。記者教育でもデジタルスキルが重視されているという。「私も苦手なところだが」と言って、披露された揮毫には「記者を宣伝する」。SNSで記事を宣伝し、読者に仕事を理解してもらおうのが重要だという。取材過程や記者の顔が見えることが信頼につながるのだから。トランプ氏によってメディア不信があらわになったが、読者とのつながり、その声に耳を傾けるといふ前向きな機会になったととらえたい。

毎日新聞社社会部副部長 長野 宏美

社会部記者の醍醐味



藤川 忠宏
 日本経済新聞社
 元論説委員、弁護士
 第6回／10月5日／10人
 出席

■メディアは多角的な視点提供を

36年間勤めた新聞社を定年退職後、弁護士に転身して8年になる。二つの仕事に愛着を持つが、生まれ変わって選ぶとしたら新聞記者だという。弁護士は依頼人に雇われた「ガンマン」で「実体的な真実を求められない」。

インターネットの時代。見たい情報しか見ない風潮が社会を分断させている。今こそメディアは多角的な視点を提供し、社会に共通の基盤となる空間を作るべきだと考える。「そのときの空気、尻馬に乗るな」と助言する。論説委員だった1994年、松本サリン事件で被害者の夫に疑いがかかった時、社説執筆を求められたが断った。「事件か事故か分からなかった。論評は確定した事実に基づくべきだ」と考えたからだ。書いた新聞社は謝罪に追い込まれた。理性で納得できるところまで取材を尽くすことの大切さを説く。

毎日新聞社多摩総局長 青島 顕

土曜記者ゼミ

調査報道編④ 10・19 / 出席…29人
 ○「伝書鳩になるなよ」

朝日新聞社特別報道部 横枕 嘉泰
 フジテレビジョン報道局社会部遊軍
 キヤップ 知野 雄介

記者になりたての頃、デスクによく注意された。

「お前、伝書鳩になるなよ」
 今回、2人の講師の話聞きながらふとその言葉を思い出した。

朝日新聞の横枕氏は取材に際し、「アジェンダ」課題を設定することの重要性を説いた。自分たちは今、何を取材すべきか。端緒が降ってくるのを待たず、自分たちで仕掛ける。定期的に会議を行い、何時間でもアジェンダについて議論したという。

フジテレビの知野氏は原発除染マネーの不透明さや外交官ナンバリーの駐車違反金の踏み倒しについて独自取材を展開した。当局からの1次情報に頼らず、身の回りにある「0次情報」をつかむ努力が必要との言葉に背筋が伸びた。

自分は伝書鳩になっていないか。記者としての存り方を考えさせられる時間となった。

日本テレビ報道局社会部 菊地 庸太

被災
防災 減災

台風19号

被災・防災・減災 最新録⑩

「城山ダム（神奈川県）で緊急放流の可能性」。10月12日午後2時、報道フロアに緊張が走った。「（下流の）相模川が氾濫するかもしれない」。間をあげず気象庁担当記者からは、「東京に大雨特別警報が出そうだ」と報告が上がる。正午前のニュースで江の島は、雨、風ともに強くはなかった。しかし、台風19号は山沿いで猛烈な雨を降らせていたのだ。

同3時半、気象庁は7都県に大雨特別警報を発表。これを受けてテレビ朝日では、同4時から翌13日昼まで断続的に報道特別番組を編成、河川の氾濫、ダムの緊急放流、浸水、土砂崩れなど刻々と変わっていく状況を伝え続けた。

取材態勢を構築するにあたって報道局では、直近の台風15号並みの強風、さらには4年前、鬼怒川が決壊した「関東・東北豪雨」の台風18号並みの豪雨も念頭に、安全最優先で取材をするという方針を確認していた。とはいえ台風15号の「強風イメージ」を引きずっていたことは間違いなく、これほどまでに雨が降り、多くの川が氾濫することは考えが及ばなかった。

テレビの台風取材といえば、激し

命を守る情報を分かりやすく

神保 修麻 (テレビ朝日報道局社会部デスク)

い風雨の映像と記者リポートが〈定番〉と思われるかもしれないが、今は違う。画面では、文字やCGを駆使しながら避難所、交通インフラなど命を守ってもらうための、あらゆる情報を提供するようになっている。

しかし、今回、放送上で飛び交った「気象・災害用語」——例えば、「緊急放流」「河川氾濫」「特別警報」「避難指示」など——度々使ってきたこれらの言葉の意味について、我々は視聴者や被災者の方々に、しっかり伝えられただろうか。正直、自信は持てない。ただ、もっと具体的に分かりやすい災害報道ができるかもしれないと感じている。今後も工夫を怠ってはいけない。

じんぼ・しゅうま▼1995年入社
カメラマン 番組ディレクター 警
視庁キャップなどを務め 2017
年から現職



写真上：道路が冠水し、消防のボートで救助される人たち(10月12日午後7時3分/川崎市高津区) 写真下：多摩川の増水で水没した兵庫島公園(10月12日午後5時20分/東京都世田谷区) いずれも東京新聞提供



台風19号が東京を直撃した10月12日、翌日の朝刊の編集責任者だった。鉄道各社が異例の「計画運休」を打ち出す中、地下鉄駅までたどり着き、なんとか出勤した。雨がガッパが役に立たないほどの豪雨だった。

編集局は「安全を最優先に」を合言葉に、夕刊朝刊とも必要最小限の体制で紙面製作に臨んだ。通常は十数人は働いている学生バイトは全員休んでもらった。出勤不能な社会部、写真部、整理部員ら十数人は前日から泊まり込み、夕刊の早版を組んだ整理部員には電車があるうちに帰宅するよう促した。夕刊は、気象庁担当記者の解説、閑散とした銀座の繁華街や新宿駅のルポ、台風15号に続いて試練を受ける千葉県南部のルポなどを自

最小限の体制で紙面製作

瀬口 晴義 (東京新聞編集局次長)

社で出稿し、通信社の原稿も活用した。朝刊早版の締め切りは160分繰り上がった。最終版も2時間繰り上がった。1面トップの写真は増水し、河川敷まで浸水した夜の多摩川の印象的な一枚だった。その近くで氾濫が起きたとの一報が入り、最終版を差し替え「台風上陸 多摩川氾濫」との横凸版の見出しを張った。

風雨が激しく、夕刊を配達できない販売店もあった。高速道路の閉鎖などで朝刊が届くのが遅れた地域もあった。異例づくめの対応で無事に新聞を作り終えて肩の荷が下りたが、取材は翌日から本番だった。翌朝は台風一過で快晴。取材を自重していた支局や社会部の記者たちが現場に向かう。日時がたつにつれて死者や不明者、決壊、氾濫した河川が増えていく。支局員の奮闘で被害に苦しむ被災者の現実を広く伝えられているかな……。そんなことを考えていたら、台風21号の接近に伴う低気圧が、台風15号で打ちのめされた千葉県などの被災地に記録的な大雨を降らせ、再び多くの犠牲者を出した。地球温暖化の影響で今年のような台風被害は日常的になるかもしれない。取材手法、新聞製作の在り方を根本的に見直さなくてはならないと痛感している。

せぐち・はるよし▼1987年中日新聞
(東京新聞)入社 論説委員 社会部長を
経て 2017年から現職

関電役員金品受領問題

中島 正喜(共同通信社社会部次長)

最初の情報に半信半疑、謎は今も

半年ほど前、取材から戻ってきた記者から「福井県高浜町の元助役が関電役員にカネを贈ったという情報があります」と聞かされた。「何のために？」と尋ねると、「よく分かりませんが、原発の再稼働を働きかけるためかもしれない」と記者。私は「関電自体が再稼働を望んでいるわけですよ。贈賄工作するなら相手は国じゃないの」と首をかしげた。

関西電力役員らが高浜町元助役、森山栄治氏(故人)から多額の金品を受け取っていた問題。取材開始当初、記者には申し訳ないが「またげなげな話(ガセネタ)かな」と疑っていた。だが、取材を進めていくうちに①関電は、元助役と関係が深い建設会社「吉田開発」へ原発関連工事など次々と発注し、多額の工事を支払っていた②吉田開発は森山氏への約3億円を提供③森山氏は関電役員らに金品を提供——という構図が見えてきた。

電気料金を原資とする原発マネーが還流して関電経営陣のポケットに入っているのであれば、とんでもないスキャンダルだ。何としても記事にしくちやいけないとの思いを強くしていった。

説得力欠く、関電の説明

第一報記事を配信した9月26日夜、八木誠会長(当時)は共同通信の取材に対し「個人的な話。組織的な話では全然ない」と強調。問題を「個人」に矮小化しようとしている印象を受けた。一方、10月2日の記者会見では金品受領について「会社として対応すべきだった。大いに反省している」と妙な面持ちで語り、個人任せにしていたことを悔いた。二つの発言は、ニュアンスは大きく異なるものの、いずれも金品受領が会社ぐるみではなかったという釈明のように聞こえる。

だが果たして会社ぐるみでなかったと言えるのだろうか。森山氏によ



金品受領問題についての記者会見を終え、頭を下げる関西電力の岩根茂樹社長(中央右)と八木誠会長(同左)ら(10月2日/大阪市/共同通信社提供)

る金品提供は原子力部門では知られており、個人レベルで対応することが長年にわたり引き継がれてきたという。それならば「会社ぐるみで個人任せにしていた」と説明すべきだったのではないかと思う。吉田開発に金沢国税局の査察が入った直後の昨年2月、八木氏ら6人が1億6千万円近い分を取りまとめ返還している事実を踏まえても、組織性がなかったとは言えないはずだ。

関電のこれまでの説明には、まだまだ疑問点が多い。金品の原資について「詰めて考えたことがなかった」とするが、森山氏と関係が深い吉田開発に多額の工事を支払っていたことは大勢が知っていたはずであり、もし想像すらしたことがない

なら感覚が麻痺していたとしか言えない。また、森山氏に事前に伝えていた工事概算額などは、社外に発信しても支障がなかったというが、それなら他の業者にも同じように伝えていたのか。工事情報の提供と金品に對価性はないとし、森山氏は「自己顕示欲の満足」のために金品を贈っていたという説明も、あまりにも関電に都合がよく、説得力を欠く。

ニュース部門で新聞協会賞受賞

元検事総長をトップとする第三者委員会が改めて解明に乗り出した。社内調査では、20人が約3億2千万円相当を受領したことが判明したが、人数や金額はさらに増える見通しだ。関電が信頼を取り戻すには「うみを出し切る」(岩根茂樹社長)がなく、われわれ報道する側も動きを注視していかなければならない。共同通信の一連の報道は、2019年度新聞協会賞「ニュース部門」を受賞させていただきました。申請は新聞大会直前の駆け込みとなりました。慌ただしい中、審査していただいた関係者の皆さまに御礼申し上げます。

なかしま・まさき▼1993年入社
阪社会部 本社社会部などを経て
2014年10月から現職

諫早湾干拓訴訟

金澤 皓介(西日本新聞社社会部)

最高裁審理差し戻し 終わらぬ混迷 国の責任は

「間接強制」「請求異議訴訟」「独立当事者参加」……。めったに耳にしないう裁判用語が紙面に躍る。国営諫早湾干拓事業(長崎県諫早市)関連訴訟の記事は、社内ですら「発行エリアの九州で完璧に理解しているのは30人くらいでは」と言う人もいるほどだ。

その一つ、2010年に確定した開門判決を国が守らないばかりか「開門を強制するな」と漁業者側に求めたのが「請求異議訴訟」だ。福岡高裁は昨年7月、国の訴えを認め、開門確定判決を事実上「無力化」させる判決を出したが、最高裁は9月13日、これを破棄して審理を高裁に差し戻した。

1997年、「ギロチン」と呼ばれた潮受け堤防の閉め切り以降、有明海でノリの色落ちや魚介類の不漁が相次いだ。事業の影響とみた漁業者は堤防の排水門開門を求めて提訴した。2010年、福岡高裁は国に開門を命じ、時の民主党政権が上告

を断念し確定。国は表面上は開門を目指したが、今度は干拓地の営農者らが農業被害などの懸念から開門差し止めを求めて提訴。17年、長崎地裁は国に開門差し止めを命じた。国は開門義務も、開門しない義務も負い「司法のねじれ」と言われた。

10年の開門確定判決後は、開門を認めない司法判断が続いており、国も開門しない方向性で解決を図りだした。一番のネックだった開門確定判決の効力を失わせようと起こした「請求異議訴訟」は、司法闘争を事実上決着させる可能性があった。

予想もしなかった訴訟進行

取材の中で「非開門の流れが固まる」と予感する瞬間は何度かあった。でも、漁業者側は国に開門差し止めを命じた訴訟に第三者として参加を申し立てる(独立当事者参加)など、予想もしない手法を繰り出す。10年の開門確定判決を無視すると決め込む国を動かそうとした弁護団の



判決を傍聴するため、最高裁に向かう開門を求める漁業者や弁護団(9月13日午後/東京都内/筆者提供)

知恵の産物だと思う。

ただ、あまりに複雑すぎるのだ。記事は法律や判例を読み込み、識者に取材を重ね、締め切りぎりぎりまで同僚記者と議論した。図解や年表を添え、Q&A形式にまとめるなど、読みやすさにも工夫を凝らした。それでもどれだけ読者に理解してもらえたか。正直自信を持ってない。

今回の最高裁判決も悩ましかった。最高裁は結論を出さなかったものの、判決理由を読み進めると、10年の開門確定判決を「暫定的」と言及しており、「非開門の方向性を示唆した」とみる識者もいた。判決に喜ぶ漁業者たちの声を聞きながら、どう読み解くべきなのか悩んだ。

報道量と現場感情に「落差」

報道のボリュームと地元の捉え方に「落差」も感じる。14〜17年の3年間、干拓地がある諫早支局に勤務した。日頃の取材や日常生活で、開門問題が話題に上がることは驚くほど少なかった。堤防閉め切りから20年超。司法闘争の場は佐賀、長崎両地裁から福岡高裁、最高裁と、どんどん現場から遠ざかる。進んでいく訴訟についてコメントを求めても、漁業者側、営農者側双方の当事者すら意識が裁判に追い付いていない。年老いていく当事者ら。「うんざりする」もう区切りを付けてほしい」と何度も聞かされた。

かつて国は「最高裁の統一的判断を求めると繰り返し、決着を司法に委ねてきた。結果、地域には対立と疲弊が積み重なるばかりだった。最高裁の一応の判断が出て、やはり誰も納得できる解決の道が見えたとはいえない。巨大公共事業の結果にどう向き合い、着地点を見いだすか。国が果たすべき責任を問い、つぶさに報じ続けることが自分たちの役割だと思いを新たにしている。

かなざわ・こうすけ▼2006年入社
熊本総局 諫早支局などを経て 17年
8月から現職

ベルリンの壁崩壊から **30** 年

強権体制を砕いた自由の熱気

中井 良則

あ、しまった。

そう思った時は遅かった。雑踏の中、2、3人の制服警官に取り囲まれてしまった。ドイツ語でまくしたてられ、何を言っているのかわからない。だが、言いたいことはよくわかる。「何をやってるんだ」

ベルリンのフリードリヒ・シュトラッセ(通り)駅の殺風景な構内。1989年11月9日にベルリンの壁が崩壊して3、4日たっていた。東ベルリン市民が連日、西ベルリンを訪れ、買い物だ、見物だ、親族再会だ、と西を歩き回り、東に帰っていく。Sバーン(高架鉄道)と地下鉄が交差するこの駅が東への数少ない出入り口だった。ラジカセ、おもちゃからバナナ、缶コーラまで東では手に入らない商品と、自由の風を大切に抱えた人々であふれていた。熱気で息が詰まるほどだ。

「これは絵になる」。意気込んで小さなカメラを構えた。ここは東側だから、照明は薄暗いが、ばればれば面

倒だ。こっそりシャッターを押す。ところが日本製高性能コンパクトカメラは暗さを自動的に探知するらしい。頼んでもいないのに、フラッシュが光った。万事休す。

職務執行に熱心な警官に報道の自由を訴えたが聞く耳は持たない。カメラを取り上げる。裏ブタをこじ開ける。フィルムを引っ張って感光させる。慣れた手つきだった。一面掲載写真は幻と消えた。

東におびえた西の女子学生

自由往来はベルリンだけで発生したのではない。東西ドイツの国境も開放され、人の波らしい。そう聞いて、レンタカーを借り、国境の町を目指した。西ベルリンの女子学生を英語の通訳に頼み助手席に座ってもらう。アウトバーン(高速道路)に乗りベルリンを離れ、東に入ると彼女が「いやだ、帰る」と言い出した。東の人間とは話したこともないから怖い、とおびえている。生まれた時

から壁があった彼女にとって、心の中の壁は簡単には崩れないらしい。「同じドイツ人じゃないの」と頼み込み、人口1200人の国境の町へツッセンに着いた。

ここまで来たら最前線まで行きたい。幅5キロの立入禁止区域内の民家を訪ねた。家の前に検問所とフェンス、監視塔がある。その向こうが西ドイツだ。寒々とした原っぱに5日前まで鉄のカーテンが降りていた。「この家に外国人が来たのは40年ぶりかねえ」と68歳の女主人が話す。通訳をしてくれた女子学生の表情が和らいでいったのを覚えている。

崩壊の9カ月ほど前だったか、西ベルリンでポツダム広場の壁を見たことがある。観光客用の小さな展望台に上ると壁の向こうが見渡せる。



東独政府が往来の自由を発表したのを受け「ベルリンの壁」に立つ市民たち。手前が西ベルリン。後方は東ベルリンのブランデンブルク門(1989年11月9日/ドイツ・ベルリン/AFP=時事)

戦前は繁華街だったのに、誰も歩いていない。なぜかウサギが一匹、無人の街を跳ねまわっていた。

いま増え続ける国境の壁

2015年7月、日本記者クラブのドイツ・イスラエル取材団に加わり、ベルリンを再訪した。26年前に歩いたフリードリヒ駅はありふれた駅だった。チェックポイント・チャーリーへの検問所は保存され、観光客がつまらなそうにのぞいていた。ポツダム広場は人々が忙しく行き交う。ウサギは消えたらしい。

第二次大戦が終わった時、世界で国境や境界の壁は7つあった。ベルリンの壁が倒れた1989年には15カ所。だが、いま77カ所に増えたという(USAトゥデイ紙2018年5月24日)。

それでも、あの警官はフィルムを抜くいやな任務を二度としなかっただろう。初めて東の人間と話した彼女の心は穏やかになっただろう。新たに壁を作りだす人もいる。だが、壁を砕き、乗り越える人はもつとたくさん世界中にいる。

なかい・よしのり▼クラブ前専務理事
毎日新聞ロンドン特派員時代、1989年11月10日、西ベルリン(当時)に入り取材に当たった。

新・列島報告 99 岩手県
釜石市でラグビーW杯

「特別な場所」で1試合実施 今後の課題はスタジアム活用

細田 清
(岩手日報社運動部長)

日本が初の8強入りを果たし、今も熱狂の余韻が残るラグビーワールドカップ(W杯)日本大会。決勝までの45試合のうち、1次リーグのたった1試合が行われたのが岩手県釜石市の釜石鶴住居復興スタジアムだ。全国12会場のうち最も小さく、遠い街。それでもやはり、ここは「特別な場所」だった。

その試合は9月25日のフィジー対ウルグアイ戦。強豪国によるビッグマッチでなくとも、釜石にW杯がやってきたという現実だけで、スタジアムとその周辺は祝祭的な空間となった。東日本大震災から8年半。津

波で全壊した釜石東中、鶴住居小の跡地に造られたフィールドに、夢のような光景が広がったからだ。

両チームとも釜石で起きたことを理解し、特別な思いで対戦に臨んだ。キックオフの前には、1万4025人の観客とともに震災犠牲者へ黙とう。試合は劣勢とみられたウルグアイが格上のフィジーを3点差で下し、白熱した攻防がスタンドの興奮を呼んだ。敵味方を超えた高揚感が心地よかった。

■震災直後の内輪話が「夢」の原点

そもそも震災で千人を超す死者、行方不明者を出し、競技場もなかった釜石でW杯が実現したのはなぜか。きっかけとなる言葉を発したのは震災当時、釜石シーウェイブス(SW)日本選手権を7連覇した新日鉄釜石の後継チームIIのゼネラルマネジャーだった高橋善幸さん(54)とされる。「復興の過程の中で手作りのW杯ができれば、釜石開催の意味があるのでは」

震災発生からまだ2カ月足らず。新日鉄釜石OBとの内輪の会話だった。ただ、高橋さん自身は未曾有の惨禍の真ただ中におり、とても動けない。そこで今は釜石を離れた北の鉄人たちが支援団体「スクラム釜

石」を結成し、釜石招致の声を上げる。被災した市民の多くが「ラグビーどころの状況じゃない」と考える中、始まった活動は時間の経過とともに官民を巻き込み、4年後の2015年3月、開催地に決まった。

■「聖地」生かして復興を

W杯と復興は関係あるのか。そういう見方は今もある。スクラム釜石の代表を務めたV7戦士の石山次郎さん(62)でさえ「復興の手段に正解はない」と、これで良かったのか自問を続ける。スタジアムの建設費は常設部分だけで約39億円。今回、釜石ではもう1試合予定されていたが、台風19号の影響で中止になり、W杯用の仮設スタンド(約1万席)設置で掛かった約10億円は1試合実施しただけで消える。今後は年間3千万円余りの維持



震災犠牲者に黙とうをささげる選手と観客(9月25日/釜石市/岩手日報社提供)

費が必要だ。

だからこそ、スタジアムの有効活用が何より重要になる。特にラグビーのプロリーグ構想が持ち上がる中、どう関わられるのか。地理的ハンデはあるが、楯円球の世界で釜石という地名は地元の人が思う以上に「聖地」として敬意を持たれていると常々感じる。そのソフトパワーを最大限に生かす場になればいい。

「鉄と魚とラグビーのまち」を掲げ、製鉄業の最盛期に9万人を超えていた市の人口は3万3千人まで減った。新日鉄釜石の合理化により、2001年にクラブチームとして再出発した釜石SWは、悲願のトップリーグ昇格を果たせないまま下部リーグで苦闘が続く。

今年、福岡の人ながら古巣に愛着を持つ新日鉄釜石OBの森重隆さん(68)が日本ラグビー協会の会長に就いたのは、釜石にとって追い風だ。日本代表の躍進を受け、森さんは「20年後くらいに(W杯を)もう一回やらないと」と意欲を語った。ラグビーへの関心がかつてないほど盛り上がりつつあるこの好機を逃さず、夢の続きへ動きだしたい。

ほそだ・きよし▼1989年入社 運動部長 報道部専任部長などを経て 2017年4月から現職

皇室報道、抜きつ抜かれつ悪戦苦闘 昭和天皇から雅子さん婚約まで

塚原 政秀



つかはら・まさひで
1945年9月生まれ 学習院大学
法学部卒 68年共同通信社入
社 警視庁 司法 皇室を担
当 ロッキード事件で検察担当
社会部長 名古屋支社長 常
務理事 退職後 文教大学情
報学部で9年間非常勤講師 N
HKインサイダー取引事件第三者
委員会委員 現在 第三者委
員会報告書格付け委員会委員

天皇陛下が即位を宣言する「即位
礼正殿の儀」が10月22日、約29年ぶ
りに行われた。筆者が宮内記者会の
常勤メンバーだったのは、1979
(昭和54)年から2年間。その後も共
同通信社部署皇室班メンバーやデス
クとして89年の昭和天皇崩御や現天
皇が皇太子時代のお妃探し報道に深
く関わった。常勤はもう40年も前の
ことになる。「即位の礼」を機に、
常勤時代やその後の皇室ウオッチャ
ーとしての悪戦苦闘の日々を振
り返った。

◆昭和天皇「腹八分目」発言

まず、常勤時代の話から始める。
当時、宮内庁は、「記者会見」をな
ぜか「お会い」と呼んでいた。宮内
庁の見解では、「会見」は、あくま
でも天皇が外国の元首と会うことを
指していた。記者と会うのに「会見」
を使うことはまかりならぬというこ

とである。まだ取材に対しての皇
室の壁は厚かった。現在はもちろん
、「記者会見」に改められている。

当時の会見は、那須御用邸などが
使われた。会見は約30分、天皇が
散策中に記者とバッタリと出会った
という想定である。私を含め、各社
の記者がそれぞれ社名と名前を名乗
り、挨拶する。天皇は記者一人一人
の前まで進み、丁寧に応対する。
79年の初めてのときは私もかなり緊
張していた。初めに、当時、話題と
なっていた解散総選挙についてある
記者が質問すると、昭和天皇は、困
った顔もせず、笑いながら「そんな
ことは皆さんの方が知っているのだ
は」などと、ユーモアたっぷりにか
わされた。記者団は爆笑。会見は一
気に和んだ雰囲気包まれた。翌80
年の会見では、健康の秘訣について
「腹八分目」といふ発言。昭和天皇は
まだまだお元気だった。

◆徳仁親王とジンギスカンの味

常勤時代、浩宮徳仁親王は、学習

院大学文学部史学科に在学中だっ
た。80年2月に成年式を迎え、成年
皇族となった。「お妃探し」はまだ
大きな話題になっていなかった。山
登りが趣味で、関東の雲取山と北
海道の大雪山系登山に同行した。山
頂での記者会見が慣行となってい
た。後にこの山頂会見は、結婚につ
いて(その目安として)「いま何合目
ぐらいですか」との記者団の質問に
つながることになる。徳仁親王と雲
取山荘で一緒にみたご来光と、大雪
山で現地の人が担いで山の上まで上
げたジンギスカンのご相伴の味は一
生、忘れない。

常勤が終わると、自動的に遊軍の
皇室班に否応なしに組み込まれた。
主な仕事は、代替わりに備えての取
材と予定原稿作りだった。本社内の
窓のない10人程度が入れる部屋が与
えられた。

共同通信では、Xデーに備えて私

が皇室班入りする前から、年表や写真と合わせた「ご生涯」おことば集「記者会見録」などの記事が作られていた。それを定期的に手直しする作業や、時代が変わるので天皇制や皇室に関する企画記事も作り始めた。政治部にも皇室班ができ、社会部と合同で代替わり儀式がどうなるのかや、憲法上の問題点などについて、法制局幹部や戦後の皇室制度作りに関わった人々からも取材した。しかし、その口は当然ながら固かった。

◆天皇崩御で「9分のスクープ」

この水面下の秩序が破られたのは、1987年9月19日付朝日新聞朝刊の「天皇陛下、腸のご病氣、手術の可能性も」のスクープだった。結局、昭和天皇の国体での沖繩訪問は、実現することはなかった。当時、私は、太平洋戦争で唯一地上戦のあった沖繩に天皇が初めて訪問するということが、那覇で前線作りなどにあたっていた。昭和天皇は、87年9月22日に宮内庁病院に入院、手術。1年後の9月19日、吹上御所で吐血、以後重体が続き、国内では自粛ムードが広がった。

この日以降、共同通信では、地方の支社局の記者も動員、皇居の各門や侍医、東大医師団など、1日30、

40人の記者やカメラマンが徹夜でべタ張りする体制をとった。結局、取材は、張り番の弁当や車の手配など兵站の編集庶務も含めた111日に及ぶ総力戦となった。

そして、89年1月7日未明から侍医らの動きが激しくなり、皇太子はじめ皇族方が続々と皇居に。「共同通信社会部」「共同通信社社会部編」によると、この日午前6時33分、宮内庁記者からの連絡で「危篤状態と判明」の速報、この後、午前7時46分、政治部から「午前6時33分、崩御」の加盟社に向けた重大速報のチャイムが鳴った。宮内庁の発表よりも9分早い特ダネ速報だった。この



「即位礼正殿の儀」で天皇陛下の即位を祝し、万歳三唱する参列者ら
(10月22日午後1時24分/宮殿・松の間/共同通信社提供)

時、社内にはいた私は、全身から力が抜けていくのを感じた。

1993(平成5)年1月6日夕、総括デスクだった私は、事前に準備していた膨大な予定原稿の手直しをしながら、ギリギリとその瞬間を待っていた。この日、ワシントンポストが「皇太子妃に小和田雅子さん」との報道をし、新聞協会報道小委員会が招集されたからだ。そして、井内康文社会部長から「解除」の声掛けがあり、午後8時45分、申し合わせは解除された。共同通信からは、新聞紙面の7、8割分に当たる大量の記事や写真などが加盟社に送信された。協会加盟各社は宮内庁からの強い要請を受けて、92年2月13日、関連報道の自粛申し合わせを締結していた。

◆自粛期間の蓄積で勝負決まる

この日、宮内庁からの発表はなく、各社の報道内容は、自粛期間中の蓄積によって決まった(石井勤著『皇后雅子』)。初めて皇太子が雅子さんと会ったのは、雅子さんが外交官試験に受かったばかりの86(昭和61)年10月、スペイン・エレナ王女の歓迎パーティーだった。その後、共同通信は、高円宮邸で長い時間、皇太子と雅子さんは会っていたという事実を担当記者がつかみ、徹底した周

辺取材が行われた。雅子さんの母方の祖父が公害問題を抱えたチッソのトップだったことから、交際は中断。この後、92(平成4)年、皇太子の「強い希望」で交際が復活した。結婚が煮詰まりつつあった同年12月には、翌年1月19日の「皇室会議開催」との決定的な情報も得て、お二人の同級生や恩師の座談会など準備を進めていた。

現場の頑張りや先輩たちからの重要情報提供もあり、取材はそれなりに先行していた、と思っていた。申し合わせ解除後の読売新聞1月7日付の朝刊紙面には、前年10月3日、千葉県の新浜鴨場での隠密デートと皇太子のプロポーズの記事がでかかると掲載されていた。

明仁天皇の2016年の「人権宣言」とも言える「おことば」をきっかけとして、生前退位が実現した。終身在位制の存続は、事実上、困難になったと言える。令和の新皇室が出発するに当たって、皇位継承権者が三人となり、「皇太子」もいない現状をどう考えるか。女性・女系天皇の容認も含めた国民的議論が今こそ必要とされている。また、前例を踏襲したとされる一連の代替わり儀式と憲法との整合性はどうか。まだ、議論は尽くされたとはとても言えない。

私が会った
あの人イラストレーター・田村セツコさん
「発展途上が一番おしやれよ」

青柳 絵梨子(共同通信社)

「ハッピー」なたたずまいの奥

にある、寂しさや切なさ。いつも
発展途上の気持ちでいることの
若々しさ。イラストレーターの田
村セツコさん(81)からいただいた
数々のメッセージは、あれから
何年たっても、私を励ましてくれ
ている。

田村さんは少女誌のおしゃれ通
信や名作『赤毛のアン』などの挿
絵で知られる。お茶目で楽しそう
な少女たちの絵は、時代を超えて
女性に愛されている。

2012年の秋、田村さんは東
京の弥生美術館で初の回顧展を開
いた。その名も「HAPPYをつ
むぐイラストレーター 田村セツ
コ展」。私は10代少女たちのファ
ッションなどの「かわいい文化」
を連載していて、日本のそれを牽
引してきた田村さんに学ぶため、
観覧会へ出かけた。

銀行を辞め絵一筋に

トークイベントで司会に呼び込ま
れた田村さんは、ひらひらと軽やか
に現れた。ファッションは個性的で、
真っ赤なリングのモチーフを付けた
ベレー帽に、白のパフスリーブブラ
ウスとふわふわのロングスカートを
まとっていた。声は明るく、会場に
来ていた友人の作家をトーク相手に
巻き込み、コーラス仲間と自身のテ
ーマソングというデビュー・レインル
ズの「TAMMY」を合唱していた。
周囲に幸せな気分を振りまく妖精の
ような人だと思った。

その頃、連載の下調べで多数のフ
ァッション誌をめぐっていた私は、
「ハッピー」という記号に辟易して
いた。目に飛び込んでくる文字を組
み合わせれば「愛されてモテればハ
ッピー♪」なのである。でも、田村
さんのそれは違った。

田村さんは高校時代、画家の松本



(2012年10月/筆者提供)

かつちに弟子入りした。しかし、画
家が不安定な職業だと分かって、卒
業後は銀行に就職。帰宅後に絵を描
き、月に一度、師匠宅で勉強した。
ある日、師匠が少女誌の仕事を紹介
してくれた。田村さんは夜な夜なカ
ットを描いては、銀行の昼休みに出
版社に届けたが、師匠の恩に報いる
ため、絵一筋で生きていくことに決
めた。

厳しい道のりだった。仕事はなく、
数年はつらかった。銀行を辞める時、
両親に経済的な負担をかけないこ
と、愚痴をこぼさないこと、後悔し
ないことを誓っていたから、うまく
いなくても「うまくいってる」と
話していた。不安で、寂しくて、神
保町の交差点で涙をこぼしたことも
あった。

自分を元気にしたい少女を描く

田村さんの「ハッピー」は孤独も、

挑戦も、山あり谷ありの人生も、
ひらりひらりと生きていく知恵も
含んだ力強いものだった。田村さ
んは自身が描く少女たちの性格に
ついて「エスプリを感じさせるよ
うな。自立。甘えがないのかな。
なんか、男性からカワイイと思わ
れた子じゃないんです。自分を
元気にしたい子ね」。今も現役で、
女性たちを励まし続けている。

もう一つ、印象深い言葉がある。
ある日、「どうすれば絵をうまく
描けますか」と聞くと、「うまく
描こうっていう意識は、本当は邪
魔なの」と言う。「自分はうまい」
とあって描く人の絵からは、おこ
りが出てしまっているのだそう
だ。「私、下手なんです」と言っ
てる人の絵はずっと若々しい。謙
虚でいられるから。発展途上が一
番おしやれよ」うまいことより大
切なのは、その人の気持ち。破れ
目があった方が、魅力があふれる。
可能性がそこからスパークするの
よ」。すがすがしい気持ちになっ
たことを覚えている。

(あおやぎ・えりこ 札幌支社編集部)
次号は河原千春さん(信濃毎日
新聞社)にバトンが渡ります。

日本記者クラブ賞・特別賞の候補をご推薦ください

今年も、日本記者クラブ賞・特別賞の候補者を募集します。

両賞の候補推薦を募集する案内を今月、プレスの基本会員と個人会員全員にお送りしました(メール登録がある方にはメールで、ない方には郵送)。

両賞とも、「プロが選ぶベストプロ」に与えられる賞として日本のジャーナリズムの高い水準を示すものであり、当クラブの公益目的事業でもあります。未受賞であれば、以前推薦された候補を再度、応募されても構いません。

来年1月31日(金)に推薦募集を締め切り、推薦委員会と選考委員会の2段階で審査。4月の理事会で受賞者が決まり、贈賞式は5月末に行います。

▼日本記者クラブ賞

この賞は、「取材、報道、評論活動を通じて、ジャーナリストとして顕著な業績を挙げ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰するもの」(日本記者クラブ賞規約第2条)です。会員または法人会員社に属する現役ジャーナリスト個人を対象に、個別のスクープではなく、最

近数年間の業績を重視して選考します。クラブ会員であれば推薦できます。

創設から45年以上の歴史を持ち、これまで54人が受賞、2019年度の受賞者は、芹川洋一・日本経済新聞社論説フェローでした。

▼日本記者クラブ賞特別賞

2012年度に新設され、原則として会員以外のジャーナリズム活動を顕彰しますが、会員社の取材班・番組班などチームとしての業績も対象となります。また外国人や故人も対象となります。クラブ会員だけでなく、日本新聞協会もしくは日本民間放送連盟の加盟社に属する方であればどなたでも推薦できます。

2019年度の特別賞は、金本麻理子氏(ドキュメンタリー番組ディレクター)、リチャード・ロイド・パリー氏(英ザ・タイムズ東京支局長)が受賞しました。



両賞とも、所定の推薦書に推薦理由(2000字以内)を記入し、参考資料を添えて提出してください。推薦書は、クラブのウェブサイトにダウンロードできます。詳細は事務局クラブ賞担当の村田(03-35503-2727)へお問い合わせください。



「ラマダン(イスラム教の断食月)に入る」。毎年、初冬に入る頃、経団連の税制担当者に1本のメールが入った。発信者は30年

以上にわたり経団連で税制論議を指揮し、2017年11月に急逝した阿部泰久さん。「税制改正大綱がまとまる年末まで禁酒する。一同、奮戦するように」との阿部さん流の檄文だ。担当者は、永田町、霞が関を駆け回る日々に入る。

「ラマダン」の冬

担当記者も阿部さんを訪ねた。経団連会館の自席より、自民党本部や国会議員会館の廊下で会うことの方が多かったのは、与党税調、主税局幹部との折衝や情報収集を続けていたからだ。記者に交じって、力士のような体格の阿部さんが、税調会合の壁耳をする姿は冬の風物詩だった。

1998、99年の小淵内閣の「何でもあり」の大減税を取材した私も、阿部さんから「党税調幹部の非公公式会合は」ダイヤモンドホテル」と電話をもらったり、主税局幹部の車を、警戒されないようマイカーの日産マーチで追

かけ、「ニューオータニに入った」と伝えたりすることも。法人税率引き下げによる経済活性化や賃上げ効果に異議を唱えるなど、論調では経団連と距離を置くことが多かったが、一緒に取材している感覚になることもしばしばあった。

亡くなる前月に出された著書『法人税制』で、「与党税調は毎年度の税制改正がすべて」「政府税調は現行税制を大きく離れた改正が論じられない」と指摘。格差社会や少子化対策を視野に入れた抜本改革を果たそうと、毎年度改正とは距離を置いて税制を議論する民間団体の運営に関わっていた。団体代表の森信茂樹さんは毎日新聞に寄せた追悼文で「経団連常務理事の地位にあっても、受付に立ち、名札を机に置き、後片付けを黙々としていた」と振り返っている。

阿部さんのいない3度目の冬が来る。寒さを熱燗でしのぐ私は「ラマダン」は受け継がないが、新聞、会報作りなどあらゆる場で、抜本改革への思いを伝えていきたい。

毎日新聞社編集編成局長
塚田 健太

マイBOOK  マイPR

■『分断の時代 混迷する世界の読み解き方』

岡部 直明(日本経済新聞出身)

国際政治・経済の接点に照準

冷戦終結30年の世界は混迷の度を深めている。米中新冷戦は世界経済を揺さぶり核危機をもたらす。英国のEU離脱をめぐる混乱で欧州もきしむ。「分断の時代」にあるからこそ、偏狭なナショナリズムはやめにして、アジア太平洋に融合の枠組みをつくることだ。その鍵は日本が握る。国際政治と国際経済の接点に照準を合わせ、大胆に提言した。野球、音楽、映画という趣味に重ね合わせて「主役なき世界」を読み解くのも隠し味だ。



日経BP社
1,760円

■『ODA幻想 対中国政策の大失態』

古森 義久(産経新聞社ワシントン駐在客員特派員)

対中国政策はなぜ正反対の結果に

日本国民は血税で自国への軍事脅威となるモンスターを育てたのか。日本が40年にわたり中国に贈り続けた総額3兆数千億円のODA(政府開発援助)の総決算はそんな疑問を提起する。対中ODAの目的は友好と民主主義を進め、軍事には寄与しないことだった。



海竜社
1,760円

だが日本の対中経済援助はまさにその正反対の結果を招いた。なぜそうなったのか。日本の戦後の対外政策でも最大規模のODA政策の総括を元中国駐在の筆者が伝える。

■会議報告

●第500回企画委員会(10.7 会見場)

今後のゲスト候補などについて検討した。

出席 西村委員長、坪井、上田、磯崎、橋本、藤井(彰)、榊原、小川、森田、杉田、川上、山田、近藤、井上、瀬口、宮内、伊藤、出川、播摩、小栗、平井、福田、倉重、藤森の各委員。

●第407回会報委員会(10.9 大会議室)

新委員の曾我部桂・共同通信地域報道部長(旧居石乃氏)があいさつした後、11月号の編集について協議した。

出席 乾委員長、曾我部、桑田、竹内、神田、迫田、長竹、西井の各委員。

●第506回会員資格委員会(10.21 小会議室)

事務局が新委員の指尾喜伸・読売新聞編集局長(旧佐伯聡士氏)と津川卓史・TBSテレビ取材担当局長兼外信部長(旧井上洋一氏)を紹介した後、11月1日付入退会を審議、理事会に答申した。

出席 田中委員長、山浦、指尾、内山、津川、山本、高木、堀木の各委員。

●第235回施設運営委員会(10.28 小会議室)

7月から9月分のアラスカの売り上げと貸室利用状況について事務局が報告した後、事務局から提案があった明年1月からの洋食レストラ

■『悩めるローマ法王 フランシスコの改革』

秦野 るり子(読売新聞出身)

ローマ法王フランシスコの実像に迫る

2013年に中南米出身者として初めてローマ法王に選ばれたフランシスコは、キリスト教徒が圧倒的に少ない日本でも、よく知られる。ただ、それは、質素を好み貧者に寄り添うといった情報がほとんどであろう。だが、教義を揺るがしかねない改革を導入し、反対する高位聖職者を容赦なく切り捨てる冷徹な指導者の側面をも併せ持つのがフランシスコである。パチカンで起こっていることを非キリスト者にわかるよう伝えようと努めた。



中央公論新社
902円

■『石川忠久講話集 埋もれた詩傑—河野鉄兜—その洒落た風趣』

前田 隆弘(NHK出身)

江戸末期は漢詩文化の爛熟期

テットウは医者、横笛の名手、勤王の志士で博覧強記の漢詩人。江戸では詩敵を論駁して命を狙われ、九州各地では傑物として大歓迎されるなど全国に盛名を馳せた。明治の前年に43歳で没し、たちまち洋風文化の波間に埋もれた。



神戸新聞総合出版センター
2,750円

碩学が、その作品の再評価を通して、日本漢詩の真髄を分かりやすく説いた臨場感溢れる初の講義録。「風雅な世界」を漢語で存分に創造し得た「幕末の文人」の底力を再認識させられる。

 新しいOB会員

■ 天日 隆彦 1981年読売新聞入社。東北総局、宇都宮支局、文化部記者、文化部次長、論説委員などを経て2018年退社。現在、帝京大学法学部教授。



報道の近現代史に関心を寄せています。プレスセンターで刺激を受けながら、「メディアと政治」について、引き続き考えていきたいと思っています。

ンと4月からのパーティーメニューの料金改定案を承認した。年末年始の閉室期間も決めた。

出席 上崎委員長、赤羽、袴田、林(恭)、有木、長崎の各委員

●第639回理事会(書面)

別掲(19頁)の役員の一部交代と11月1日付の入退会を承認した。

●第640回理事会(10.25 会見場)

一、19年度上半期の事業報告と決算について事務局が報告した。

一、日本記者クラブ賞規約に基づき、20年度日本記者クラブ賞と同特別賞を実施することを決定した。

出席 原田理事長、梅野副理事長、土生専務理事、小松、乾、石川、町田、喜聞、後藤、粕谷、松波、西野、富田の各理事、岡田、岡部の各監事。

レストラン *価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 霜月懐石(11/29まで)

先付：穴子小袖巻き、いわし香梅煮、ふぐ煮ごりなど お椀：蟹真丈 造り：鮪、鯛、勘八 焼物：さわら袖庵焼 煮物：ぜんまい信田巻き 揚物：海老きり湯葉揚げ 食事：蟹雑炊 水菓子：季節の果物(5,500円) (板長：大井由光)

洋食 季節のおすすめコース(12/27まで)

牡蠣フライのサラダ仕立て ラビコットソース、オイスターチャウダーまたはコンソメスープ、オマール海老のポアレ マルセイユ風、チョコレートナッツサンデー、パン、コーヒー付き(3,850円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。(シェフ：黒須修一)

ふぐ特別コースのご案内 2020年1月31日まで

毎年好評をいただいているふぐの特別コースを今年もご用意いたします。刺身、唐揚げ、鍋などふぐづくしをお楽しみください。お一人6,050円で、お二人からお受けします。ご予約は03-3503-2723へ。

忘年会、新年会をクラブでいかがですか

12月2日(月)～1月31日(金)

忘年会、新年会など社内の集まりに、お手頃なプランをご利用ください。料理が洋食8品にお寿司とおそばがついて3,300円、2時間の飲み放題付きは4,950円です(別途、部屋代がかかります)。ご予約は03-3503-2724へ。

クラブネクタイ NEWカラー登場

日本記者クラブのロゴ入りネクタイに新色が登場。紺とシルバーのストライプ柄で、落ち着いた印象の1本です。受付横のガラスケースで紹介、販売しています。価格は1本7,337円(税込)です。



HP更新情報 <https://www.jnpc.or.jp/>

取材ノート 旅の記憶 (ベテラン記者によるエッセー) 新規掲載 「上海センチメンタル・ジャーニー～アグネス・スメドレーの寓居を訪ねて」千野境子会員(産経新聞出身)

緒方貞子さんの会見記録を公開しています



10月22日に92歳で死去した緒方貞子さん(元国連難民高等弁務官、元JICA理事長)は過去12回、クラブで会見しています。初登壇時(1991年4月25日)の会見音声、および、下記の会見記録をウェブサイトに掲載しています。(1998.9.4/2004.3.22/07.10.18/08.5.20/09.5.25/11.11.21)

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階)..... ☎3503-2723 ●会員事務..... ☎3503-2727
- 洋食レストラン(10階)..... ☎3503-2766 ●経 理..... ☎3503-2728
- 貸室予約・宴会打ち合わせ・ ☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み... ☎3503-2722
- 受 付..... ☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス... kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：133社 ●基本会員：737人 ●個人会員：1,233人
- 法人・個人賛助会員：57社・127人 ●特別賛助会員：104人
- 名誉・功勞会員：11人 ●学生会員：89人 計：190社・2,301人

ウェブ版「50年史」公開しました

11月1日、日本記者クラブは創立50周年を迎えました。記念事業の「50年史」をウェブサイトで公開しました。以下のURLもしくはQRコードからご覧になれます。(https://www.jnpc.or.jp/history/50th)

過去の周年誌のPDF版もお読みいただけます。



秋のゴルフ会 鈴木民三会員が優勝

クラブのゴルフ会が10月18日(金)に若洲ゴルフリンクス(東京)で開催され、鈴木民三会員(写真右)が春のゴルフ会に続き連覇を果たしました。次回は来年5月に開催予定です。



悪条件でも力まずプレー

台風19号の大災害が東日本各地に及び、心が痛みます。私の故郷福島も原発に続く水害の被災地となり、とりわけ小さい頃に水泳をして楽しんだ阿武隈川の堤防の決壊というニュースは衝撃でした。そんな時の日本記者クラブのゴルフ会は気分を変えるものになると思い、雨の予報でしたが参加しました。肌寒い風で難しい条件でしたが、力まずプレーしたのが結果的に良かったようです。参加者が少ないのは残念でしたが、それで優勝できたのかなとも思っています。

鈴木民三(日本経済新聞出身)

<理事交代>

喜聞広典 中日新聞社取締役論説担当兼東京本社論説室論説主幹 (旧深田実氏)

<法人会員代表変更>

読売新聞社 山口寿一 グループ本社社長 (旧白石興二郎氏)

<訃報>

長沼節夫会員(時事通信出身、77歳)が11月6日に死去されました。ご冥福をお祈りいたします。

今後の行事予定(11/7現在)

15㊦	10:30～11:30 10階ホール 「オリンピック・パラリンピックと社会」③ 武藤敏郎 東京2020組織委員会事務総長
20㊦	12:00～13:00 10階ホール 西村康稔 経済財政政策担当相 会見 15:00～16:30 10階ホール 「安保改定60年 その功罪と今後」① 五百旗頭真 兵庫県立大学理事長
26㊦	18:30～20:30 10階ホール 試写会「さよならテレビ」
27㊦	14:30～15:30 10階ホール 「オリンピック・パラリンピックと社会」④ 山下泰裕 日本オリンピック委員会会長

会報委員会

委員長=乾 正人
委員=神田 俊英 桑田 広久 迫田 朋子
曾我部 桂 竹内 竜一 塚田 健太
中村 直樹 長竹 孝夫 西井 泰之
渡辺 昌己

(事務局：本庄五月 杉本翔一)

☎03-3503-2754 FAX 03-3503-7271

撮影：三村 幸作 (日本経済新聞社写真映像部)



南アフリカ戦終了後、スタッフや選手の子もたちも加わり、記念写真に納まる日本代表 (10月20日、東京都調布市)

「ワンチーム」に初恋

「ONE TEAM」。10月20日、ラグビーワールドカップ準々決勝で南アフリカに敗れたが、目標のベスト8進出を果たした日本代表の表情は清々しかった。

ラグビーは伝統国「ティア1」、それに続く日本など「ティア2」、発展中の「ティア3」と分類される。日本大会はティア2による初開催で、ティア2の予選全勝も初だった。ビデオリサーチによると、日本戦予選4試合いずれかのテレビ生中継リアルタイム総視聴人数は、推計約7903万人、準々決勝の日本対南アフリカ戦の視聴率は平均41・6%と今年の全番組1位だ。全国16カ所に設けられたファンゾーンの累計入場者は26日時点で102万人と過去最多記録を更新した。大会を支えるボランティアへの応募総数3万8千人も史上最多と、記録づくめとなった。

ジェイミー・ジョセフ・ヘッドコーチ(HC)率いる日本代表はチームスローガン「ONE TEAM」のもと、グローバルとローカルの融合「グローバル」をキーワードに、多様性を尊重しつつ結束を目指した。団結の象徴として甲冑「カツモト」を帯同し、リーチマイケル主将が試合後相手チームで活躍した選手に刀を贈って「ノーサイドの精神」も大切にされた。ラグビー憲章の「品位、情熱、結束、規律、尊重」を体現し、自分たちより重い強豪のスクラムを押し、パスをつないで鮮やかな連携トライを決めた。

2003年に優勝したクライブ・ウッドワード元イングリランドHCが「日本がもたらしたすべてに感謝しかない。初めてラグビーを見たときのように、このスポーツにもう一度恋をした」と評した。ワールドラグビーのビル・ボームント会長は「ティア」に疑問を呈し、「日本の意見を聞きたい」と表明している。新たな歴史がここから始まる。

(稲澤 裕子)